燈籠人形の作り方

材料は主に竹と和紙です。顔と手足には木の型があり、そこに和紙を貼り重ねて作ります。和紙は埼玉県小川町のものを使います。胴体や腕などは竹ひごと針金で骨組みを作り、上から和紙を貼りつけます。

人形の質感にもこだわりがあります。和紙を粗くもめば硬く、細かくもめば「ちりめん」のような柔らかい風合いになるといいます。

衣装などの模様はロウを溶かしたもので縁取りし、人形の種類に合わせて色付けをします。昔は、日本画で使われる「岩絵の具」で描いていました。一般的な絵の具だと色が濃すぎて人形の中の光がうまく透き通って見えないため、今は染料を使っています。

人形の中の明かりは、かつて屋外で上演していたころは油を入れて火をともす小さなカンテラでした。やがて屋内で上演することが多くなったため、今は豆電球などを使っています。

今も昔も燈籠人形は練習と本番、そして予備用の3体を用意します。これは体の中に火のついたカンテラを入れるため、もし公演中に燃えてもすぐ交換できるように、という理由に基づく伝統です。

また、背景も人形と同じように和紙で描かれ、後ろから光を当てることで絵を浮かび上がらせます。背景にも糸が仕付けられ、操り手が動かすことで、上下したり裏返したりして芝居の場面を転換します。

人形作りには経験者の知識が欠かせません。若い保存会メンバーたちは、過去の公演に携わったベテランのアドバイスを聞き、保管されている人形や公演の記録を何度も見直しながら、少しずつ人形作りを進めていきます。